［共同研究報告］

「SHAIHENS」
―海外でのグループ展の試み

荒木恵信
伊藤英高
遠藤研二
中島俊市郎
林　泰史

1．はじめに

2005年3月に金沢21世紀美術館において、金沢美術工芸大学教員作品展「寄りあう語法－6人の表現－」が開催された。この展示では、着任間もない教員6名が、絵画、立体造形、映像など、それぞれの異なるジャンルの作品を出品した。オープンしたばかりの金沢21世紀美術館を舞台に、金沢美術工芸大学の展望を拓く一つの契機となった。

この展示の成果を踏まえ、次の展示に繋げて行く事を検討していたが、グループ展を海外で行う機会を得ることが出来た。日本を離れ、海外での展示を経験することが創作活動の新たなきっかけとなることを期待し、実行に移す事となった。また、この企画は国際交換展覧会であり、金沢市民芸術村においてスペイン人アーティスト23人によるグループ展を催すことも計画した。

海外において作品のコンセプトはどこまで伝わるのか、観客がどのような反応を示すのか非常に興味深いながらも展示企画として最後まで成立させることが出来るのか、不安も拭いきれないままのスタートとなった。

2．経緯

まずここに、この企画に関する経緯の概略を時系列に挙げておきたい。

2005年
12月　遠藤研二准教授が、スペイン人現代美術作家イマ・ピコ氏より日本との現代美術の国際交換展開催の可能性を打診され、それを受け検討を始める。

2006年
2月　スペイン・バレンシアの画廊La Sala Naranjaにおいて日本人作家展を、金沢市民芸術村においてスペイン人作家展を行うことで合意。

8月　日本人作家、各自作品をスペインへ輸送。

9月10日　遠藤准教授・伊藤英高准教授スペイン・バレンシア入り。
14日　伊藤准教授、日本帰国。
21日　スペイン・バレンシアにてグループ展「SHAIHENS」初日。
30日　遠藤准教授、日本帰国。

10月 8日　グループ「SHAIHENS」展終了。

スペイン・バレンシア市風景

［キーワード］ スペイン　バレンシア　グループ展

12月 2日　スペインよりイボ・ロビラ夫妻来日。
6日～17日　金沢市民芸術村にてスペイン人作家グループ展「挑戦 DESAFIOS」開催。
9日　イボ・ロビラ夫妻スペインへ帰国。

3.スペインでの展示

2005年12月、東京のアートスペース「遊工房」において行われたシンポジウム「アーティスト・イン・レジデンスのほんとうのはなし」に遠藤准教授がパネリストとして参加。自身の体験談や将来のレジデンスのあり方などを写真などを交えて講演した。その際、「遊工房」に滞在制作していたスペイン人現代美術作家イマ・ピコ氏より、スペインと日本との国際交換展ができないかという提案を受け、検討することになった。

翌2006年1月、伊藤准教授に事の次第と展覧会開催について相談。若手教員にとって海外での展覧会発表を行う絶好の機会と判断し、これを実現する方向で一致した。イマ・ピコ氏との数度のやり取りの後、スペイン・バレンシアの画廊La Sala Naranjaにおいて日本人作家展を、金沢市民芸術村にてスペイン人作家展を行うことで合意した。

展覧会開催の決定と同時に、他の金沢美術工芸大学の若手教員に参加を促すこととなった。また、日本代表として、教員のみでなく外部若手作家も参加させたほうが有意義であると考え、外部作家も巻き込んだ交換展とすることで参加教員に同意をとった。3月には、遠藤准教授がイギリス・ベルファストにて氏と会談。展覧会の方向性を確認しあった。又、イマ・ピコ氏の要請で駐日スペイン大使館文化部を訪問。文化参事官ギジェルモ・キルパトリック氏と面会、スペイン人の訪日費用助成が決定された。ただしこの資金はスペイン・バレンシアの画廊La Sala Naranja に支払われることになったので、日本側との金銭的なやり取りは一切無かった。

8月、スペインでの展示に参加する各教員は、作品梱包・輸送準備を開始した。新たに新作を制作する教員もあり、慌ただしいスケジュールが続くこ

スペイン・バレンシアの画廊La Sala Naranja
搬入当初の様子

スペイン・バレンシアの市場

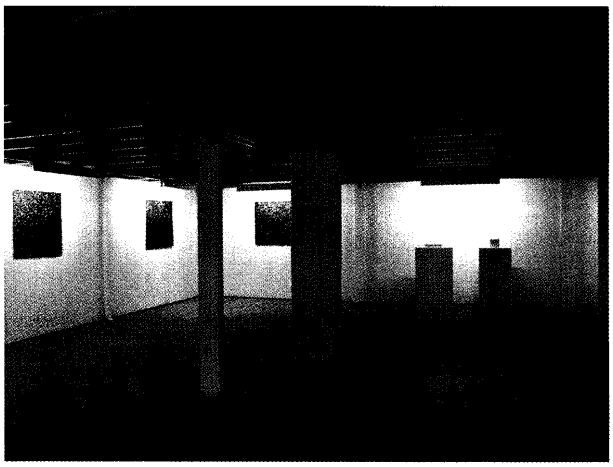
「SHAIHENS」会場風景

ととなった。輸送については海外向けということもあって、厳重な梱包作業が要求された。

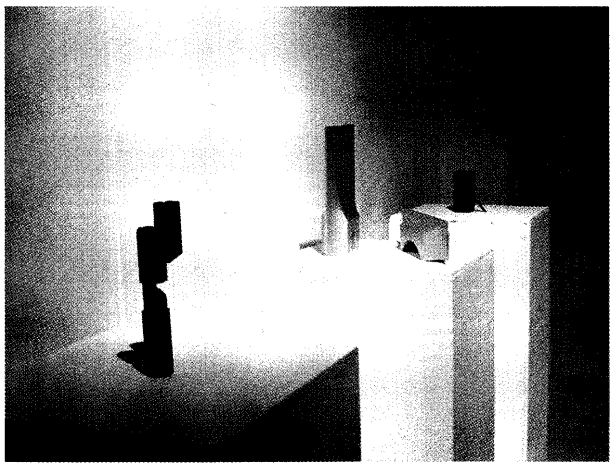
9月10日、遠藤准教授、伊藤准教授が個別にバレンシアに到着、当初は連絡が取りあえない状況が続く等トラブルにも見舞われたが、無事バレンシア市内で落ち合い、展示に関する打ち合わせを行った。又、日本から輸送した作品が税関で止められていることが判明、海外展示ならではの労力を強いられることとなった。スケジュールの都合上、展示開始を待たずに伊藤准教授は日本へ向けスペインを出国したが、遠藤准教授は画廊の代表トニー・カルデロン氏と税関へ向い、作品を引き出すための交渉を行い、作品引き出しが可能になった。

作品の搬入が遅れてしまったことで、トニー・カルデロン氏は展覧会の会期を予定より一週間遅らせることを提案。遠藤准教授もやむなしとしてこれを承諾した。結果、展示会期を一週間スライドさせ、9月21日からの開催となった。

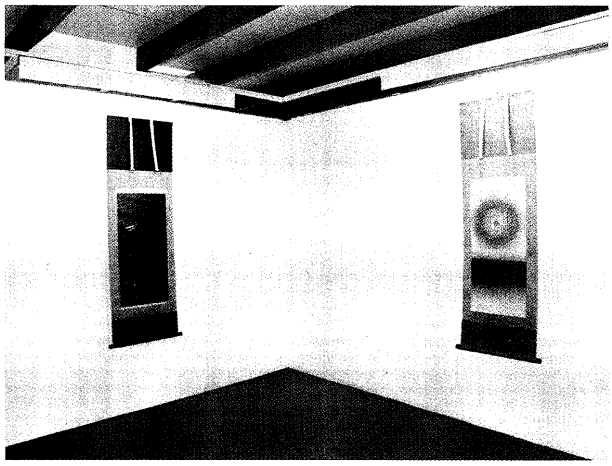
9月15日、日本作家の全作品が無事画廊に到着した。20日までの準備期間、遠藤准教授の指示の元、画廊のスペイン人メンバーが搬入作業をサポートしてくれることとなった。複数の作家による作品はジャンルも全く異なり、展示意図を明快に表すことに困難も付きまとわったが、スペインの画廊側の友好的な助言にも大変助けられることとなった。作品の開梱作業を行った後、レイアウトについては遠



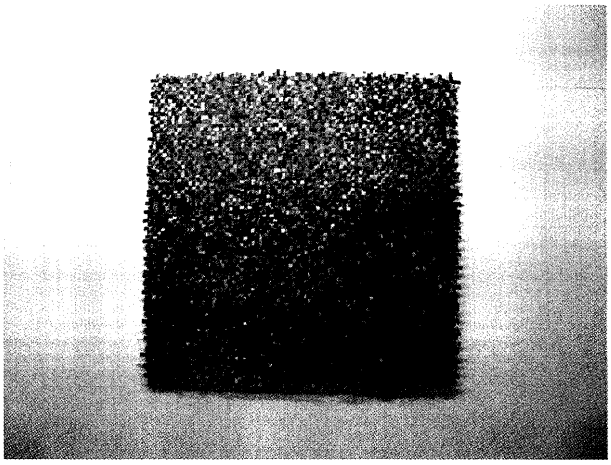
「SHAIHENS」会場風景



林 泰史作品



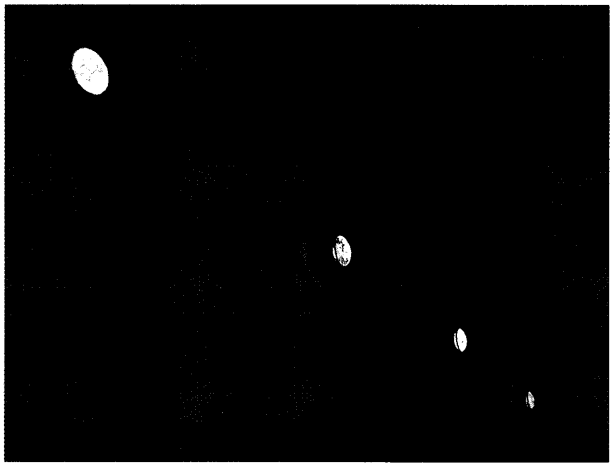
荒木恵信作品



中島俊市郎作品

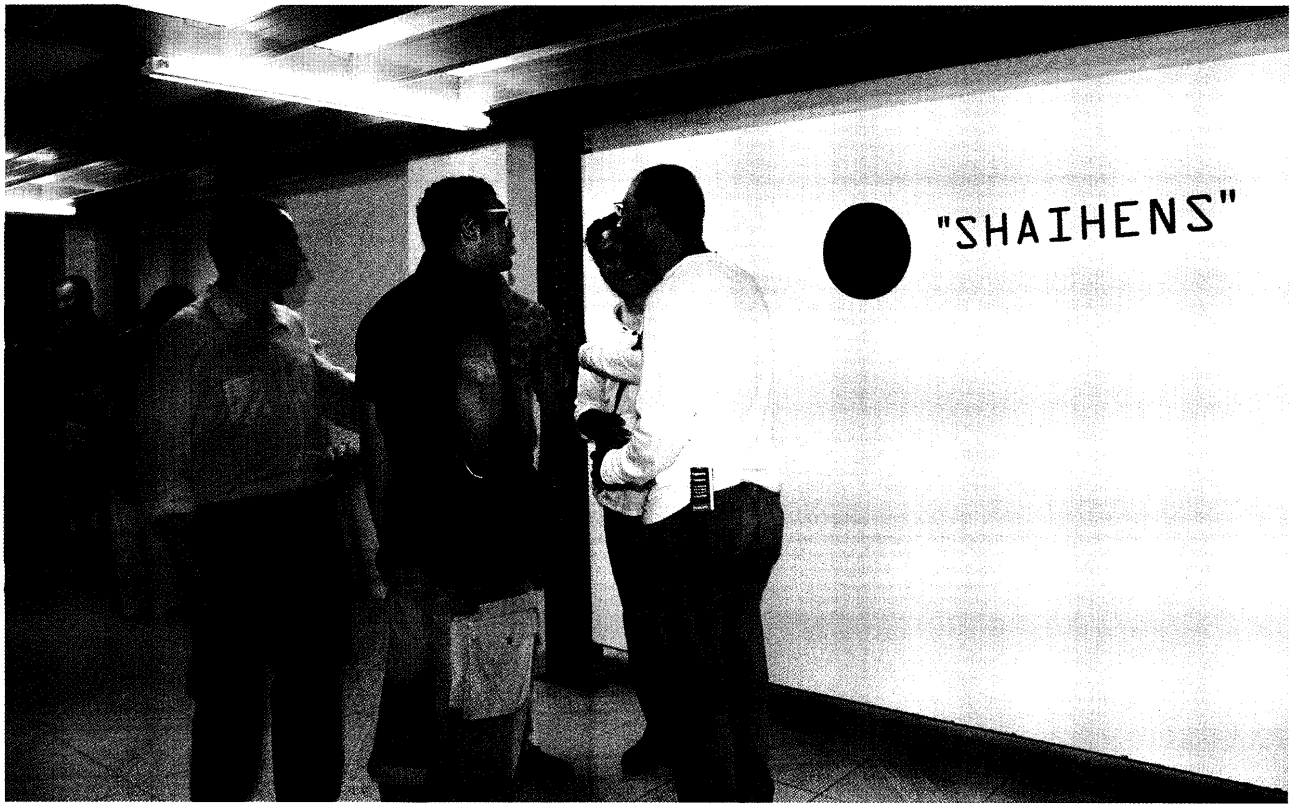
藤准教授とメンバーが共に検討しながら作業を行った。また、休廊日には、スペイン人メンバーと交流会を催すなど展示を通して人と人との積極的な国際交流が進められた。

9月21日、スペイン人メンバーの多くの助力のもと、グループ展「SHAIHENS」は初日を迎えることとなった。オープニングパーティーが午後7時より開催、地元のスペイン人がパーティーに多数参加、日本人の作品に触れる機会を得た。今回の特色である多様な表現媒体を見て、日本のアートの現状に改



遠藤研二作品

伊藤英高作品



「SHAIHENS」会場風景

「SHAIHENS」オープニングの様子
多く地元スペイン人が駆けつけた

めて興味を持つ観客も多かった。

展示は翌月10月8日まで続いたが、遠藤准教授は終了前に帰国、後ほど再びスペインに渡り搬出作業に付く事になった。改めてスペイン人メンバーの協力を得た上で搬出作業を完了、金沢において行われる交換展の展示作品数点、及び広報媒体を画廊より預かり帰国することとなった。

4.金沢での交換展

スペインでの展示は無事終了を迎えることになり、展示に参加した教員の中で、海外でのグループ展における反省点などを総括する事が出来た。それを踏まえた上で、このプロジェクトのもう一つの企画である、金沢においての交換展を実行へ移す段階に入った。

2006年11月中旬から、展示会場になる金沢市民芸術村の会場視察、状況確認、必要機材・資材の検討・収集を行い、スペイン人アーティストの作品をどのように展示するか教員でミーティングを重ねた。作品を出品するスペイン人アーティストの数は総勢23名、写真、絵画、ビデオ映像など、スペインでの「SHAIHENS」展に劣らず多様なジャンルの作品が送られてきた。

12月2日、スペイン人アーティストであるイボ・ロビラ氏が来日した。彼は写真作品を制作しており、広告写真の仕事も数多くこなしているカメラマンでもある。今回はご夫人と共に初めての金沢ということであった。

イボ・ロビラ氏の到着後間もなく、彼を中心に、金沢美大教員、アルバイト数名によって搬入作業が行われた。大判の写真プリントを展示するための大型パネル制作、ビデオ映像作品を投影するためのプロジェクターのセッティングなど、2日間の準備期間を費やした。

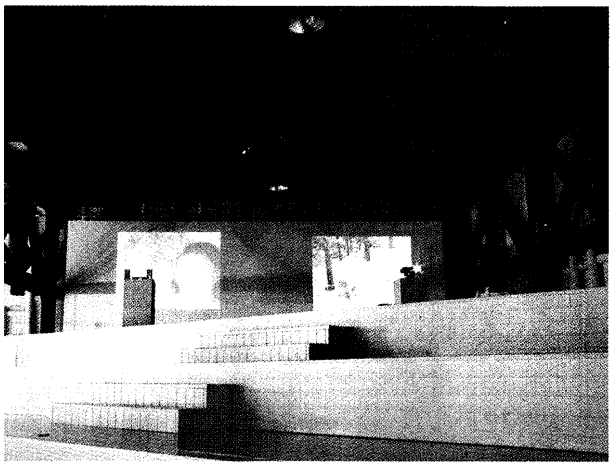
12月6日、深夜まで及んだ前日の搬入作業も無事終えることができ、金沢市民芸術村にてスペイン人作家グループ展「挑戦 DESAFIOS」が開催、8日

金沢市民芸術村におけるスペイン人作家交流展
「挑戦 DESAFIOS」

「挑戦 DESAFIOS」会場風景

にはオープニングパーティーも行われ、金沢市民、金沢美大関係者、学生等、多くの方々が訪れた。イボ・ロビラ氏も12月の金沢の厳しい寒さに震えながらも、多くの人々と交流できたことに満足そうだった。

今回の交換展の展示作品は、例えば写真を例にとっても、人間の肉体をモチーフにするものが多く、日本人の持つ肉体に対しての感覚との違いを感じさせられる要素を見て取ることができた。会期中、展示に訪れた一般市民も、そのあっけらかんとした描写に強いインパクトを受けていた。ビデオ映像作品についても、同じ事が言えるが、一部には特にヨーロッパ、スペインといった印象がそれほど強くなく、日本人アーティストの作品といっても分らないようなものも見受けられ、メディアの違いによる国民性の現れ方について考えさせられた。



「挑戦 DESAFIOS」会場風景
ビデオ映像作品も多数上映された

「挑戦 DESAFIOS」会場風景
大型の写真作品

5.最後に

2005年12月のイマ・ピコ氏の提言に端を発し、2006年12月の金沢における交換展の終了まで、ほぼ1年に渡ってこのプロジェクトは続けられた。

このプロジェクトに参加した金沢美大の教員にとって、授業、大学の仕事を多数抱えながらの参加で、大きな負担となる曲面もあったが、海外における自分自身の作品展示の企画、海外作家を迎えての展示の企画、この2つを通して得られるものは多かったように思われる。また、このプロジェクトの大きな目的である、アジアとヨーロッパの相違点と類似点の比較、互いの文化的な固定観念の枠を広げる、という目的も大いに達成されたと言ってよいであろう。

これを機に、教員のみならず、金沢市民とバレンシア市民という異なる文化を持つ人々が、新たな芸術的刺激を共有することで、両市民の創造性が発揮されることを望むばかりである。

（あらき・けいしん　材料・修復）
（いとう・ひでたか　映像メディア）
（えんどう・けんじ　立体造形）
（なかしま・しゅんいちろう　工芸／染織）
（はやし・やすし　金工（鋳金）／立体造形）
（2007年10月31日受理）